

東日本支部だより

2007年3月1日発行

Newsletter of the East Japan Chapter, the Society for Research in Asiatic Music

定例研究会のお知らせ

◆東日本支部第30回定例研究会

時 2007年3月17日(土)午後1時30分～4時30分

所 東京芸術大学音楽学部 5-301 教室

(JR上野公園口または地下鉄千代田線根津駅下車)

司会 岡崎淑子 (聖心女子大学)

○2006年度卒業論文発表(その1)

1. 伊吹あすか (東京芸術大学) 「カントンブレのリズムにおける対話構造——イジェンヤを中心に——」
2. 藤野はるか (東京芸術大学) 「『地域芸能』の今日的状況と可能性——沖縄市の地域振興事例を中心に——」
3. 大内麻里 (国立音楽大学) 「バリ島の芸能におけるインド叙事詩『マハーバーラタ』と『ラーマーヤナ』の受容」
4. 宮川清子 (お茶の水女子大学) 「江戸鳶木遣の伝承の現状について」
5. 荻野真莉 (東京芸術大学) 「大正琴の将来を考える」

*なお、当日荻野氏は修士論文3人の後に発表します。

○2006年度修士論文発表(その1)

1. 田中有紀 (東京大学大学院) 「宋代雅楽の思想的研究——近世中国における「古楽」の再構築——」
2. 葛西 周 (東京芸術大学大学院) 「明治期日本の博覧会と音楽——近代日本音楽史の再検討という視点から——」

3. 大沼寛子 (東京芸術大学大学院) 「土川五郎の「遊戯」に関する研究——その時代的・思想的背景と作品分析——」

◆東日本支部第31回定例研究会

時 2007年3月31日(土)午後1時30分～4時30分

所 お茶の水女子大学 共通講義棟2号館 102 教室

(地下鉄丸ノ内線 茗荷谷駅下車 徒歩7分)

司会 内田順子 (国立歴史民俗博物館)

○2006年度卒業論文発表(その2)

1. 森真理子 (東京芸術大学) 「アメリカにおけるクレズマー音楽の変容」
2. 當間亜紀子 (お茶の水女子大学) 「都をどりの起源と変遷」

○2006年度修士論文発表(その2)

1. 玉井あや (東京芸術大学大学院) 「鑑賞用長唄の詞章に関する研究——改訂歌詞集『露の転文』を中心に——」
2. Deirdre Healy (ディアドレ・ヒーリー) (ロンドン大学) “Shakuhachi and Gender” (尺八とジェンダー)
3. 西脇舞 (東京学芸大学大学院) 「院政期の楽書と音楽思想」
4. 劉芋麟 (法政大学大学院) 「箏曲の段物に関する研究——中国の伝統箏曲との比較を通して——」
5. 吉岡三貴 (お茶の水女子大学大学院) 「昭和5年帝都復興祭における音楽について」

◇第32 回定例研究会

時 2007 年 6 月 2 日(土) 所 国立音楽大学

＊博士論文に基づく発表の予定

◇第33回定例研究会

時 2007 年 7 月 7 日(土) 所 大東文化大学

＊日本ポピュラー音楽学会との合同例会の予定

定例研究会の報告

◆東日本支部第 28 回定例研究会

時 2006 年 12 月 2 日(土)午後1時 30 分～4 時 30 分

所 東京芸術大学音楽学部 5-301 教室

●研究発表

1. 兼常清佐の学位申請論文について ―東京音楽学校邦楽調査掛に提出した「報告書」との関係―

蒲生郷昭(日本大学)

蒲生美津子(沖縄県立芸術大学)

(発表要旨)

本発表では、邦楽調査掛での彼の勤務状況などを明らかにしたうえで、彼があげた研究成果について、その量が知られているよりはるかに多いこと、その質がきわめて高水準であることを、まず指摘した。ついで、学位申請論文の内容を提示し、邦楽調査掛に提出した報告がどのように活用されているのか、何が付け加えられているのか、などについて具体的に考察した。

兼常清佐(1885～1957)は、大正3、4 年は京都を本拠としながら、同5 年以後は東京に本拠を移して、実質同7 年末までの5 年間、嘱託として東京音楽学校邦楽調査掛の仕事に携わった。東京音楽学校が大正5 年11 月に行った「雅楽及声明関係図書展覧会」に対する彼の貢献が大きかったことは、よく知られている。在職中に同掛に提出した「報告書」がひとまとまりになって、東京芸術大学付属図書館に所蔵される。報告書とは、(1) 報告「研究の方

法について、雅楽の音階及び音程に就て(2) 三宝院所蔵の声明書類に就て(3) 附録一声明書類目録(4) 附録二声明集及び讃類の翻訳(5) 日本人の音楽意識の内容について(6) 高野辰之宛書状の6 点である。(1) は大正4 年3 月19 日に京都から送付し、(3) は大正6 年8 月30 日に脱稿した。

大正8 年1 月に嘱託を辞したあと、翌9 年に彼は学位申請論文『日本の音楽の構造に就ての一観察』を京都帝国大学に提出し、文学博士の学位を取得する。論文は、①研究の目論見と目次、②日本の音楽の民謡の構造に就いて、③民謡以外の音楽に於ける旋律の変遷に就いて、④日本の音楽の理論に就いて、⑤日本の音楽の楽譜の変遷に就いての5 冊から成る。

上記の論文等のうち(1) は大正3～4 年の日記帳と同じ大学ノートを使用、(2)～(5) 及び①～⑤に用いた用紙はいずれも礪川堂製の600 字原稿用紙で、兼常の下宿先小石川に近い文具店から調達したものと思われる。(5) 以外はすべて兼常の自筆である。(5) と②はほぼ同じ内容であるが、(5) には五線譜や外国語図書名などを記していないことなどから、「オリジナルの未完成原稿」が存在し、それをほぼ忠実に書写したのが(5) で、未完成部分を完全に補ったものが②である、と推察する。③④⑤は、『日本の音楽』など最初期の著述や(2) (3) (4) を再構成し、大正7 年10 月中に終了した音高音程などの測定結果を盛り込んで成った。

(コメント・権藤敦子)

2005 年9 月の定例研究会での発表に続く継続研究であり、まず、兼常が邦楽調査掛で行った仕事についての蒲生郷昭氏の報告、続いて、学位論文と邦楽調査掛への「報告書」等との関係について、具体的な内容の比較検討に基づく蒲生美津子氏の報告がなされた。発表後の質疑応答で郷昭氏が語られたように、『日本の音楽』(大正2 年) への吉川英史氏の評価、昭和以後の実証的な民謡研究への小泉文夫氏、柴田南雄氏の

評価はあるが、大正9年提出の学位論文や大正3年から8年にかけて関わった邦楽調査掛への「報告書」は知られていない。近代において先駆的な兼常の日本音楽研究を跡づける上で大変興味深い内容である。また、邦楽調査掛についても、『音楽教育成立への軌跡』のなかで蒲生氏自身の言及があった後『東京芸術大学百年史』で概要を知ることができるようになったが、本発表のように視点を限定した調査によって今後さらに明らかにされるべき点があると感じた。

2. マケドニアのロマ居住区の婚礼と音楽家たち

—シュト・オリザリにおける調査から—

市橋雄二(ピクチャー・エンタテインメント)

濱崎友絵(東京芸術大学)

横井雅子(国立音楽大学)

(発表要旨)

当研究は、2006年8月上旬にマケドニアの首都スコピエで実施された調査にもとづく。スコピエのロマ居住区、シュト・オリザリにおけるロマの音楽家の活動と、当地のロマ・テレビ局を通してロマ社会におけるメディアと音楽の役割を考察することを目的とした。

1963年に起きた大地震の結果、スコピエの北部に形成されたロマ居住区シュト・オリザリは、マケドニアの他の地域と大きく異なり、人口の80%がロマ、また、70%がイスラーム教徒という際立った特徴をもつ。人口の半分は生活保護を受け、インフラの整備の貧弱さ、不十分な教育状態などの問題を抱える一方、ロマがマジョリティで、自治も保証されており、ロマとしてのアイデンティティを保持し、それを発揮しやすい環境にある。このことが独自のメディアの存在や固有の行事の実施、それら行事につきものの音楽や芸能のパフォーマンスに有利な条件となっていると見ることができる。

シュト・オリザリでは公的な文化・余暇活動は皆無に近いが、代替の娯楽を提供していると見なせるのが、二つのロマ・テレビ局と、6～8月頃に集中する婚礼の宴である。

二つのロマ・テレビ局では、ロマ語が放送の半分以上を占め、コミュニティの文化の継承に一定の役割を果たしている。また、音楽番組を通して地元のウェディング・バンドの雇用を創出したり、テレビ局のオーナーが他のメディアをも用いてロマの啓蒙、ロマ独自の文化発信や自立への手助けを行う様子も確認された。

一方、夏には多くの婚礼がシュト・オリザリでは集中する。伝統的に6日間かけてきた婚礼も近年は短縮される傾向にあるが、依然として数多くの人が関わって手厚く行われ、その多くの場面に音楽はつきものである。

従来、婚礼音楽で中心的な役割を担ってきたダブル・リードのスルラと大太鼓タパンの組み合わせ、あるいは世界的に知られるロマのプラス・バンド、プレーは、シュト・オリザリでは限定的に用いられるにとどまり、主要な役割は“エレクトリック”のウェディング・バンドが果たしている。現代のバルカン半島の多くの地域で定着している、シンセサイザーやアンプを多用したエレクトリック・バンドは、マケドニア人の中ではあまり人気がないとされるが、この地域ではロマの祝宴の不可欠な要素と見なされる。正確にはシンセサイザー、エレキ・ギターなどの電氣的な楽器に、クラリネットとヴォーカルが加わるが、いずれもアンプを通して音を増幅させ、一見、現代的である。しかし音楽自体はこの地域の歴史と複合的な民族構成を感じさせる。シンセサイザーは西アジア的微分音を出すと同時に、ジョイスティックの操作でコブシ風の音の揺らしも表現され、また音の種類では、撥弦楽器カーヌーンや太鼓のタラブカの音なども模倣し、トルコ的な大衆音楽への執着を見ることができる。一方、クラリネットはガイダやカヴァル、ドゥドゥク、シュペルカといった、バルカン半島で用いられる気鳴楽器の音色を模倣することができる。また、1999年のコソヴォ紛争後、アルバニア人が数多く流入しているため、発声や発音にはコソヴォの影響も見られ、そこにマケドニアの歴史とシュト・オリザリの現状の縮図をみてとることができる。

シュト・オリザリで行われる婚礼において音楽や音楽家は婚礼

にまつわる一連の行事に有機的に関わりあいながら、マケドニア人と明白に異なるロマの音楽的感性を、現代に即した形で表出し、また一族の婚礼のステータスを量る基準としての機能をも果たしている。

今回の調査は婚礼が集中する時期であったため、連日、長時間の演奏を続ける音楽家から話を聞く機会が少なかったが、今後はこの地区で演奏することの意味や彼らが意識する地域的な音楽の特性についての証言を得る必要がある。また、他の地域のロマの嗜好を跡付けて、そのことによりシュト・オリザリの音楽生活の特徴が浮かび上がると想定される。

一方、ロマ音楽家は一般に非ロマに対して音楽を演奏することによく知られるが、シュト・オリザリの音楽家がこの地域以外で非ロマに対してどのような音楽を、どのように演奏するのかといったことなどを考察することも、今後の課題である。また、年々増加するアルバニア人とは共通の宗教的基盤をもつため、彼らの影響も視野に入れる必要がある。

シュト・オリザリ以外のマケドニアのロマのメディア、さらにはより広範囲のロマのメディアと音楽との関わりをも継続的に調査し、音楽や芸能を通してロマが“一つの民族”という意識を形づくっていくさまも跡付けたい。

(コメント・瀧知也)

世界最大のロマ・コミュニティの実状と特殊性および現代の婚礼音楽の実際を、映像と実録の音を交えて横井氏が、着目した経緯と、今日描かれる立場や発信する存在にもなりつつあるロマ自身とメディアの関係性を見据えた問題意識を市橋氏が述べられた。シュト・オリザリは、ロマが自らのアイデンティティを保持して個性を発揮しやすい環境であり、独自のメディア発信がロマの国外出稼ぎ者にまで重要な役割を果たしているという。シンセサイザーがどのように伝統楽器による音を模しているのかを具体的に聴けたこと、またクラリネット導入の所以やこうした現象の背景

についての洞察は興味深かった。西アジア圏の他の地域、例えば中央アジアにおける同種の音楽の現代化にも比較眼を与えてくれる。シンセ代用をめぐる確認、広く共同体の外側における認識等について質問がなされた。調査は継続中で、それらの問いに対する明確な答えを含め、多民族多文化の土地柄に根づいたこの地のロマ音楽の変容と独創性に至るまで、成果を伺える日が待ち遠しい。

お詫びと訂正

前号の東日本支部だよりに下記の誤りがありました。訂正してお詫び申し上げます。

(脱落) 支部担当理事: 尾高暁子

(誤記) 参事: 原納 恵(誤)→ 原納 愛(正)

会員の声 投稿募集

会員の皆様に知らせたいと思う情報(催し物・出版物など、支部・学会への要望・質問など)をお寄せ下さい。

次号締め切り: 2007 年 5 月 10 日(5月下旬発行予定)

字数: 25 字×8 行以内(投稿者名を明記のこと)

原稿送付先: 学会本部事務局(郵送、ファクス、メール)

〒110-0005 東京都台東区上野 3-6-3 三春ビル 307 号

Fax: 03-3832-5152 E-mail: LEN03210@nifty.com

発行: (社) 東洋音楽学会東日本支部

編集: 塚原康子、尾高暁子

近藤静乃、前原恵美、熊澤彩子

〒110-8714 東京都台東区上野公園 12-8

東京芸術大学音楽学部楽理科 塚原研究室気付

Tel: 050-5525-2357・2350 Fax: 050-5525-2522

E-mail: tsukahara@ms.geidai.ac.jp(塚原)
